

西アフリカのフランス語公用語圏の児童書選書にかかわる調査報告書

アフリカ文学研究者 村田はるせ

1. 西アフリカのフランス語公用語圏のブックリスト作成

以下ではまず、西アフリカのフランス語公用語圏諸国の児童書を取り巻く全般的な状況について述べる。その後ブックリスト作成にあたっての基準や参照資料を述べ、とくに注目した出版社や作家をあげる。最後に国際子ども図書館所蔵資料についての評価や所見を記す。

2. 西アフリカのフランス語公用語圏の全般的な状況

2. 1. 西アフリカのフランス語公用語圏

この稿での「西アフリカのフランス語公用語圏」は、西アフリカで事実上フランス語を唯一の公用語としている国々を指す便宜的な用語である。これらの国は、フランスによる植民地支配あるいはそれに近い支配という経験を共有している。

本稿とブックリストで取りあげた国々は以下のとおりである。

- 1) フランス領西アフリカ (Afrique-Occidentale française) を構成していた植民地が独立した国々 (ベナン (Bénin)、ブルキナファソ (Burkina Faso)、コートジボワール (Côte d'Ivoire)、ギニア (Guinée)、マリ (Mali)、ニジェール (Niger)、セネガル (Sénégal))
- 2) 第一次大戦後にドイツの植民地からフランスの国際連盟委任統治領となり、第二次大戦後には国際連合信託統治領となった国 (トーゴ (Togo))

また中部アフリカのカメルーン (Cameroun) は、西アフリカのフランス語公用語圏諸国やフランスとは関わりが深く、後掲の雑誌『タカン・ティク (*Takam tikou*)』掲載の記事でも、カメルーンの作家や挿絵画家の作品は西アフリカで出版された本とともに批評されることがあるため、ブックリストには加えた。現在カメルーンとなっている地域はドイツの植民地となった後、第一次大戦後にフランスとイギリスに分割され、それぞれの委任統治領、後に信託統治領となった。独立時には西部の英領カメルーンの一部が仏領カメルーンと共にカメルーン連邦共和国を形成した。現在は旧仏領地域が公用語をフランス語としている。

上記のような国々では、教育言語もフランス語で、就学してアフリカ諸語を学ぶことはま

れである¹。フランス語は主要な書き言葉で、各国内に流通する児童書を含む出版物の大多数はフランス語で書かれている。しかし就学してフランス語を十分に習得しなかった人々は本を読むことができない²。そしてそのような人々は非常に多いのである³。

2. 2. 子どもの読書の状況

子どもに読書の間を提供する図書館については、この地域のどの国も資金不足のため、運営、蔵書の補充が非常に困難である。ベナンやセネガルでは、国内外の基金や NGO が図書館を設立したり、支援したりしている。ただし図書館や書店があるのは都市部であり、農村では本はほとんど流通していない。

2. 3. 出版状況

サハラ以南のアフリカ諸国で販売されている本の 90%は先進国からの輸入とみられている（Pinhas2005:75）。西アフリカのフランス語公用語圏の場合、圧倒的に多いのはフランスから輸入された本である。また、ここでは一般の人々の購買力に比して本は高価な、ぜいたく品である。しかも、これらの多くの国では教科書市場もフランスなど先進国の大手出版社に独占されている（Pinhas 2005:75）。こうしたなか国内の出版社は資金難に悩み、出版数を増やすのが容易ではない。

この地域には大きく分けて以下の二種の出版社がある。

1) 独立後まもなく政府主導で創設され、フランスの大手出版社が資本参加したものがあ
る。とくにセネガルの初代大統領レオポール・セダール・サンゴール（Léopold Sédar
Senghor）の主導で 1972 年に創設された NEA（Nouvelles Editions Africaines）がよく知
られている。

¹ サハラ以南のアフリカの大多数の国では、数十にのぼる言語が話されている。複数の言語を話せる人も多い。しかし各国でのアフリカ諸語の位置づけや言語政策には、植民地期の宗主国の言語政策が影響を与えている。植民地期、フランスは支配地でのアフリカ諸言語の発展にはまったく関心を払わなかった一方、イギリス領では支配の便宜のため、原住民法廷において現地の言語を使用したり、特定のアフリカ諸語を行政言語として整備したりした（砂野 2009:39）。本稿で取り上げている旧仏領の国々では、国内の言語は書記言語として政策的に整備されてこなかったうえ、学校教育においてアフリカ諸語はほとんど学ばれていない（ibid.:50）。これに対して、例えば旧英領のナイジェリアでは、複数のアフリカ諸語の学習が奨励され、アフリカ諸語での執筆や出版も盛んである（塩田 2009:67,74）。

² 西洋式の公教育を行う小学校（公立・私立）ではフランス語習得が目指され、やがてフランス語で授業が行われる。フランス語習得は一般に社会的上昇には不可欠と考えられている（鈴木 2009:165, 砂野 2009:128）。しかし一部の豊かな家庭を除き、フランス語は子どもにとって母語ではないため、数年就学しただけの人や、まったく就学の機会がなかった人はフランス語の読み書き能力を獲得できないのである（砂野 2009:129）。

³ ユニセフの『世界子供白書 2016』掲載の統計によると、西部・中部アフリカの成人識字率は 53%である。どの言語による識字なのかは不明であるが、フランス語公用語圏では多くの人がフランス語での読み書きについて答えたと考えられる。本稿とブックリストで取りあげた国々をみると、ニジェールの 15%を最低として、カメルーンとトーゴを除いてどの国もこの平均値に達していない（参考：<https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/01.pdf>）。

2) 1990 年代以降、サハラ以南のアフリカ諸国での民主化の流れのなかで多数誕生した、小規模な出版社がある。それらは「独立出版社 (éditeur indépendant)」とも呼ばれ、海外資本や政府の出資を受けていない。

本稿で取り上げている地域では、ベナンの Editions Ruisseaux d'Afrique やギニアの Editions Ganndal などが他の独立出版社との共同出版を主導してきた。この地域の国内の出版社は大きな財政的困難を抱えているが、独立出版社はこうした方法で 2000 年代以降に児童書出版数を増やしてきた⁴。共同出版はアフリカの出版社とフランスの出版社の間でも行われている。よく知られているのはフランスの EDICEF (Éditions Classiques d'Expression Française) が参加した Le caméléon vert (緑のカメレオン) シリーズである。

2. 4. 児童書の特徴

この地域の国内で出版される児童書は、各ページに挿絵がある「絵本」が大多数である。しかし日本での絵本に比べ、1 ページの文字数が多い。つまりこれらは、就学して母語ではないヨーロッパの言語を学ぶ子どものために書かれた、挿絵が多い「読み物」とみることができる。こうした本の主題は、1) 子どもの悩みや想像の世界、日々の暮らし、2) 伝承、3) 過去の王国の物語、4) 伝統的な儀礼や芸術 5) 貧困など社会的な問題、6) 紛争、7) 性と命、感染症や衛生、などである。

3. ブックリスト作成と選書の基準

ここではブックリスト作成の方法と選書の基準を述べる。選書に当たっては、筆者がこの地域を訪れて書店や図書館から得た情報、作家や編集者に直接インタビューして得た知見を全体に反映させた。

リストは国別に作成した。1) 児童文学の分野で先駆的な役割を果たした作家、2) 児童書の発展に寄与した作家・画家、3) 受賞作品がある作家・画家を、出身国のブックリストの最初に記すようにした。1) ~ 3) の作家・画家が国外で出版している場合もその作品を出身国のリストに掲載した。次に、それぞれの国で優れた児童書を多く出版してきた出版社、受賞歴のある出版社の本を作家別またはシリーズ別に掲載した。

⁴ 1989 年にアフリカで出版されたフランス語の児童書で入手可能だったものは、10 作前後であった (Quiñones 2010)。1990 年代以降、サハラ以南のアフリカ諸国の民主化の流れのなか、小規模出版社が多数誕生したため、1998 年に出版されたフランス語の児童書は、70 作前後にのぼったとみられる (Lebon 1999:123)。2016 年には、ベナンだけでも約 300 作の同国出版の児童書が入手可能となった。そのうち 200 作程度は Editions Ruisseaux d'Afrique が 2003 年以降に出版したもので、このうち約 100 作品が絵本である (Atchadé & Djogbéno 2016)。

共同出版の本の場合は、共同出版を主導した出版社がある国のリストに掲載した。そして共同出版した出版社を国名とともに「選書理由」欄に記載した。

西アフリカのフランス語公用語圏以外の国で出版された本でも、この地域の作家・画家との関連が深く、重要と思われたものは「その他」としてリストに掲載した。また「フランス」のリストに掲載したものは、この地域出身の作家によるものではなく、出版地もアフリカではないが、ベナンやセネガルの図書館で所蔵されていた本、アフリカ人の歴史や体験をよく表現していると思われた本である。

3. 1. 参照した文献やウェブサイト

選書にあたり、以下に記す文献やウェブサイトをとくに参照した。

参考文献：

Où va le livre en Afrique? L'Harmattan, 2003, 239p., (Africultures, no. 57).

Foucault, Jean (dossier réalisé). *Littérature enfance-jeunesse en Afrique noire*.
Karthala, 2005, 94p., (Etudes littéraires africaines, no. 20).

Foucault, Jean ; Manson, Michel ; Pinhas, Luc (direction). *L'édition de jeunesse francophone face à la mondialisation*. L'Harmattan, 2010, 299p., (Références critiques en littérature d'enfance et de jeunesse).

Amabhuku, illustrations d'Afrique. La Joie par les Livres, 1999, 87p.

Pinhas, Luc. *Editer dans l'espace francophone*. Alliance des Editeurs Indépendants,
2005, 284p., (Etat des lieux de l'édition).

Pinhas, Luc (direction). *Situations de l'édition francophone d'enfance et de jeunesse*.
L'Harmattan, 2008, 343p., (Références critiques en littérature d'enfance et de jeunesse).

ウェブサイト：

◆国際独立出版社同盟 (Alliance Internationale des Editeurs Indépendants)

<http://www.alliance-editeurs.org/>

フランスに拠点があり、世界中のさまざまな独立出版社が加入している。ウェブサイトには加入出版社のリストと出版作品が掲載されている。パリの事務所では児童書を販売はしていないが、閲覧はできる。

◆アフリリーヴル (Afrilivres)

<http://www.afrilivres.net/>

サハラ以南のアフリカのフランス語公用語圏の出版社が加入している組織。ウェブサイトでは加入出版社と作品を紹介している。

◆雑誌『タカン・ティク (*Takam tikou*)』

アフリカ、アラブ世界、カリブ海、インド洋のフランス語の児童書と読書に関する情報を発信する雑誌。フランス国立図書館の文学・芸術部門に属する国立児童書センター「本のよろこび」(Bibliothèque Nationale de France, Département Littérature et Art, Centre National de la Littérature pour la Jeunesse - La Joie par les Livres) が発行。現在ではアフリカ諸語で書かれた児童書の情報も発信している。

1989～2008 年 (1～15 号) は紙媒体として発行。これらの PDF 版を以下で読むことが可能。

http://lajoieparleslivres.bnf.fr/masc/integration/joie/statique/pages/06_revues_en_ligne/062_takam_tikou/takamtikou-sommaires.htm

2010 年以降は、年 3 回新刊情報・記事・評論を発行し、以下で読むことが可能。

<http://takamtikou.bnf.fr/dossiers>

◆Editions Ruisseaux d'Afrique のカタログ

同社が 2013 年までに単独で、あるいは共同出版で出してきた児童書のカタログ。

<http://www.ruisseauxdafrique.com/telechargement/Catalogue-2012-2013%20B.pdf>

3. 2. 注目した出版社と作家・画家

とくに注目した出版社と作家・画家を国別に記す。

ベナン

◆Editions Ruisseaux d'Afrique (以下便宜的に ERA) は児童書専門出版社。共同出版で非常に多くの絵本を出版してきた。

◆ERA 社長で作家でもあるベアトリス・ラルノン・バド (Béatrice Lalinon Gbado) は多数の絵本を創作してきた。彼女の『ザヌー おじいちゃんに教えてもらいながら (*Zannou, sur les traces de grand-père*)』(ERA, 2011) は 2013 年にサン＝テグジュ

ペリ賞（Prix Saint-Exupéry）⁵を受賞した。

- ◆挿絵画家として注目されるのは、現代芸術家のポンス・コクー・ザヌー（Ponce Kokou Zannou）で、ラリノン・バドと複数の絵本を出している。

ブルキナファソ

- ◆Découvertes du Burkina は、この国の児童文学の第一人者である作家アンソムウィン・イニヤス・イエン（Ansomwin Ignace Hien）の作品を出版してきた。

コートジボワール

- ◆NEI/CEDA の前身である NEI（Nouvelles Editions Ivoiriennes）は、既述の NEA のコートジボワール支社が 1982 年に独立した後、1989 年に破産申請、1992 年に民営化されて、NEI として再スタートしたものである（Keïta 2008:210）。NEI は 2000 年代初頭に内戦が起きるまで、以下に記す作家の作品など、この地域でもっとも多く絵本を出版していた。近年 CEDA（Centre d'Édition et de Diffusion Africaines）と合併し、NEI/CEDA となった。
- ◆ヴェロニク・タジョ（Véronique Tadjó）は詩人で、挿絵も手掛ける児童文学作家。アフリカ全体の児童文学創作を代表する作家の一人である。『マミワタと怪物（*Mamy Wata et le monstre*）』（NEI / EDICEF, 1993）が、1998 年ジンバブエ国際ブックフェアでの呼びかけによって始まったプロジェクトにより、「20 世紀アフリカのベスト 100 冊」（Africa's 100 best books of the 20th century）に選定された。作家として 2005 年にブラック・アフリカ文学大賞（Grand Prix Littéraire de l'Afrique Noire）⁶を受賞した。
- ◆ファトゥ・ケイタ（Fatou Keïta）は多数の絵本を出版している。作家としても活動し、人権や差別など、子どもの社会的な意識にかかわる主題を多く取り上げている。
- ◆恭子・デュフォ（Kyoko Dufaux）は、タジョやケイタのいくつかの作品に挿絵を描いている。フランス在住の日本人画家。
- ◆ミュリエル・ジャロ（Muriel Diallo）は、2012 年に『ビビはいや…（*Bibi n'aime pas...*）』

⁵ サン＝テグジュペリ賞は、フランス人作家アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの遺族などの支援を受けて創設された賞。1987 年からフランス語で書かれた児童文学作品に贈られてきた。受賞作品は、幼児向けの絵本、ジュニア小説、フランコフォニーの三つの部門ごとにほぼ毎年選ばれる。フランコフォニー部門の作品は、フランス語で書き、フランスには在住していない作家によって書かれた絵本またはジュニア小説から選ばれる。

⁶ 1926 年に創設され、フランスのパリに拠点を置くフランス語作家協会（ADELF : Association des Écrivains de Langue Française）は、1961 年以来毎年、フランス語で表現するサハラ以南のアフリカ諸国の作家の文学作品にこの賞を贈っている。フランス語で書かれた文学の発展などを目的とする賞。

シリーズ（Les Classiques Ivoiriens）などでサン＝テグジュペリ賞を受賞した。

ギニア

- ◆Editions Ganndal は 2017 年にボローニャ・ブックフェアで Bologna Prize for the Best Children's Publisher of the Year（アフリカ大陸部門）を受賞。共同出版でも多くの本を出版している。

マリ

- ◆Edition Donniya は 2015 年にボローニャ・ブックフェアで Bologna Prize for the Best Children's Publisher of the Year（アフリカ大陸部門）を受賞。
- ◆Cauris Livres から 2015 年に出版されたアラン・セルジュ・ゾタ (Alain Serge Dzotap) とパット・マジョニ (Pat Masioni) による『天才発明家 ンジョヤ王 (*Le roi Njoya, un génial inventeur*)』は 2015 年にミュンヘン国際児童図書館による国際推薦児童図書目録のホワイト・レイブンズ (White Ravens) に選定された。
- ◆ジャリバ・コナテ (Dialiba Konaté) は、『スンジャタ・ケイタの叙事詩 (*L'épopée de Soundiata Keïta*)』(Seuil Jeunesse, 2002) が 2003-2002 年にサン＝テグジュペリ賞を受けた挿絵画家である。

ニジェール：児童書専門出版社は存在しない (Quiñones 2016)。

セネガル

- ◆NEAS (Nouvelles Editions Africaines du Sénégal) の前身は既述の、セネガル初代大統領サンゴールの主導で 1972 年に創設された NEA である。NEA は 1988 年に分裂し、1989 年に NEAS として再出発した。
- ◆BLD Editions (Bibliothèque Lecture Développement Editions) は児童書専門出版社。近年多くの絵本を出版している。フランス語とセネガル諸語との二言語出版も手がける。
- ◆Editions Papyrus Afrique は、アフリカ諸語で書かれた本を専門に扱う、西アフリカのフランス語公用語圏では数少ない出版社。

トーゴ

- ◆Editions Graines de Pensées は他の独立出版社との共同出版を行っている。

西アフリカ以外

カメルーン

- ◆クリスチャン・エパンニャ（Christian Epanya）は、カメルーン出身で、現在フランス在住の作家・挿絵画家。作品はフランスから出版している。1993 年にはボローニャ・ブックフェアで「今年のイラストレータ賞」を受賞。*Le taxi-brousse de Papa Diop*（Syros, 2005）は、『おじさんのブッシュタクシー』（アトーン, 2007）というタイトルで、さくまゆみこ氏による日本語訳も出ている。また『サップの王たち（*Les rois de la sape*）』（Océan Editions, 2014）が 2015 年のホワイト・レイブズに選定。

西アフリカ（フランス語公用語圏）の児童文学賞

「ジャンヌ・ド・カヴァリー児童文学賞（Prix Jeanne de Cavally pour la Littérature Infantine）」⁷はコートジボワールのブックフェア Salon International du Livre d'Abidjan で授与。2017 年は、コートジボワール出身のミシェル・タノン＝ロラ（Michelle Tanon-Lora）による『タヴリーのやっかいごと（*La mésaventure de Tavly*）』（Les Classiques Ivoiriennes, 2016）が受賞。

4. 国際子ども図書館所蔵資料の評価と所見

国際子ども図書館所蔵資料には、上述のタジョ（コートジボワール）やエパンニャ（カメルーン）など著名な作家、受賞歴のある作家の作品が見落としなく収められている。受賞作品だけでなく、受賞した作家の他の作品も系統的に収集することをお勧めしたい。また今回作成のリストにあげたような、この地域の児童文学の歴史や発展に寄与してきた作家たちの作品をできるだけ集めること、シリーズで出されたものはシリーズ全体を集めることが必要だと考えられる。こうすることで作家や出版社の創作・出版の意図をよりよくとらえることができるからである。またこの地域では共同出版が盛んなうえ、出版された本のなかには国境を越えて流通しているものがある。そのため網羅的に集めることで、この地域の児童書の状況全般を浮かび上がらせることができ、蔵書全体の歴史的価値が高まると考えられる。

この地域では作家や画家の質は少しずつ高まり、これからも多くの児童書が出版されると思われる。本稿やブックリストで取り上げたアフリカの出版社は国際的なブックフェア

⁷ この賞は少なくとも 2004 年には存在したが、その後しばらく途絶え、2017 年に復活している。今後も続くかどうかは不明である。賞の名は、コートジボワールではもっとも早い 1970 年代から児童文学作品を発表しはじめた女性作家ジャンヌ・ド・カヴァリーの名にちなんでいる。

にも参加している。またパリの国際独立出版社同盟に加盟しているところも多い。こうした機会や組織を通して情報収集と本の入手は可能だと考えられる。

（参考文献）

砂野幸稔.「アフリカの言語問題 —植民地支配からひきついだもの」『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』梶茂樹・砂野幸稔編著. 三元社, 2009, pp. 31-63.

塩田勝彦.「言語の命を支える民族のアイデンティティ —言語大国・ナイジェリアのケース」『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』梶茂樹・砂野幸稔編著. 三元社, 2009, pp. 65-96.

砂野幸稔.「拡大するウォロフ語と重層的多言語状況の海に浮かぶフランス語 —セネガル」『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』梶茂樹・砂野幸稔編著. 三元社, 2009, pp. 127-159.

鈴木裕之.「ストリートで生成するスラング —コート・ジボワール、アビジャンの都市言語」『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』梶茂樹・砂野幸稔編著. 三元社, 2009, pp. 161-187.

村田はるせ.「アフリカの子どもための文学 —サハラ以南アフリカのフランス語で書かれた児童文学とヴェロニック・タジョー」『スワヒリ&アフリカ研究』2013, 第 24 号, pp. 121-140.

村田はるせ.「共同出版される児童書 —ベナンの作家・編集者 B. ラリノン・バドと Editions Ruisseaux d’Afrique の挑戦—」『スワヒリ&アフリカ研究』2015, 第 26 号, pp. 99-118.

村田はるせ.「ブルキナファソの作家アンソムウィン・イニヤス・イエンの絵本『平和のハト』のメッセージ」『アフリカ文学研究会会報=MWENGE』2016, 43 号, pp. 1-6.
<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/keiko-ku/Africa/Mwenge%2043.pdf>（参照 2018 年 2 月 22 日）

村田はるせ.「西アフリカのフランス語公用語圏での児童書出版 — セネガル・ダカールでのインタビューと観察 —」『アフリカ文学研究会会報=MWENGE』2018, 44 号, pp.13-22.
<http://web.kyoto-inet.or.jp/people/keiko-ku/Africa/mwenge44/mwenge44.pdf>（参照 2018 年 2 月 22 日）

Atchadé, Béatrice; Djogbénu, Léon. *A la découverte de la vie : entretien avec Béatrice Lalinon Gbado*. Takam tikou. 2016.

<http://takamtikou.bnf.fr/dossiers/dossier-2016-la-belle-histoire-de-la-litt-rature-africaine-pour-la-jeunesse-2000-2015/la-d-> (accessed 2018-02-22)

Keïta, Fatou. *L'édition pour la jeunesse en Côte d'Ivoire : historique et état des lieux*. Situation de l'édition francophone d'enfance et de jeunesse. Pinhas, Luc (direction). L'Harmattan, 2008, pp. 205-223, (Références critiques en littérature d'enfance et de jeunesse)

Lebon, Cécile. *La littérature africaine de jeunesse sort de ses frontières*. La revue des livres pour enfants. 1999, no. 185, pp. 123-128.

Pinhas, Luc. *Editer dans l'espace francophone : législation, diffusion, distribution et commercialisation du livre*. Alliance des Editeurs Indépendants. 2005, 284p., (Etat des lieux de l'édition).

Quiñones, Viviana. *Takam tikou, une aventure à suivre*. Takam tikou. 2010

<http://takamtikou.bnf.fr/dossiers/dossier-2010-takam-tikou-a-20-ans/takam-tikou-une-aventure-a-suivre> (accessed 2018-02-22)

Quiñones, Viviana. *La littérature de jeunesse, un art africain : Panorama 2000-2015*. Takam Tikou. 2016.

<http://takamtikou.bnf.fr/dossiers/la-litt-rature-de-jeunesse-un-art-africain-0> (accessed 2018-02-22)